

書評 災害ボランティアの心構え

村井雅清著 ソフトバンククリエイティブ (2011年)

山 口 洋 典 (立命館大学)

物事には匂がある。匂のもの、などと言えば食べものが想い起こされることが多いかもしれないが、流行歌や流行語など、その時々にこそ響くものもある。無論、ある事象を扱った学術論文や著書も、その例外ではなかろう。こうした視点から見れば、「初心者ボランティアも押し掛けつい!?」と帯に掲げられた本書もまた、匂な書の一つと位置づけられる。

本書は2011年6月18日が初版第1刷であるから、東日本大震災から3ヶ月のあいだに執筆され、世に出たものだ。観測史上最大規模の震度を記録し、福島県と宮城県と岩手県を中心に広域に及ぶ被害をもたらした上、地震のみならず火災と津波と液状化現象に加えて原子力災害を引き起こした複合型の東日本大震災への救援や復旧にあたられている最中に、「何でもありや」との言葉が帯に掲げられたことは、「ボランティア元年」と呼ばれた阪神・淡路大震災以降の「秩序化のドライブ」(渥美, 2011)に対する現場の叫びであったと推察できる。なぜなら、評者は筆者および筆者の所属する団体と、いくつかの現場で行動を共にする機会を得てきたためである。そして、それらの現場に対し、筆者らは阪神・淡路大震災によって被災した筆者らの「被災地責任を果たす」(p.185) という情念によって活動していることを、評者は深く実感し、敬服を重ねてきた。

こうした中、筆者は「ボランティアは押し掛けつい!」(p.54) というメッセージを、発災から3ヶ月で掲げねばならなかつたのである。それは「被災地に迷惑がかからないようにボランティアを管理しなくてはいけない、現地で活動する際の規範をマニュアル化して守らせないといけない」という方程式が、いつの頃からかできてしまったため、「近年、災害時にボランティアが果たす役割が注目を浴びるようになり、その重要性が認められれば認められるほど奇妙なことに『災害直後に大勢のボランティアが行くと、被災地が混乱する』という根拠不明の言説が広がっていった」ためだと筆者は言う(p.27)。

実は評者も、今次の大震災では「今はまだ、現地に行かなくていいんですね」といった具合に、言わば付加疑問文の構文によって、行動への判断というよりも思考への承認もしくは賛同が求められた。上掲の「秩序化のドライブ」という指摘に重ねて言えば、支援する側が自らの正しい判断に基づいて行動するという支援する側の秩序化への思考が先立つことにより、肝心の被支援者側が置かれた状況や構造から支援活動が切り離されてしまうのだ。

本書は海外との関わりの中でNGOという立場にこだわってきた筆者が、改めて災害ボランティアとは何か、さらにはボランティアとは何かを問い合わせた一冊である。なぜNPOではなくNGOという存在に力点を置いているのか、それは前述の「被災地責任」を拠り所とした筆者らの活動が、時に日本国内では「政策提言」の意味で解釈される災害救援の現場からの「アドボケート」(advocate)にこそ、重要な役割を見いだしているためだ。事実、「市民の代弁・代理・代役」としてのアドボケートの活動こそが支援の根本にあるとする筆者は、言語学者であるノーム・チョムスキーが「戦争を止めるにはどうすればいいのか」と問われた際「簡単なことだ。戦争に参加しないことだ」と答えたことに触れ、「災害救援を実りあるものにするには、どうすればいいのか」と問われたら「簡単なことだ。救援活動に参加すればいい」と答えるべき、と示している(p.199)。阪神・淡路大震災を前後して議論されてきた組織的なボランティア活動への法人格の付与に関する議論は、1998年の特定非営利活動促進法(いわゆるNPO法)によって結実したものの、平常時の秩序が乱れているとき、つまり行政によるガバナンスが発揮できていない状況にこそ、NGOの立場からの行動が重要となることを、筆者は改めて本書を通じて論じたとも言えよう。

本書は5章によって構成されている。第1章は筆者および筆者が代表を務める「被災地NGO協働センター」による東日本大震災発災当初の活動の経過

山口 洋典

がまとめられている。続く第2章では阪神・淡路大震災以降の災害ボランティアならびにボランティア動向が整理され、第3章において16年を経て醸成されてきたボランティア文化の批判が展開されている。そして第4章で「遠野まごころネット」などネットワーク型の支援活動の有り様が、兵庫県佐用町での水害支援(2009年)や新潟県中越地震(2004年)やナホトカ号の重油流出事故への対応(1996年)など、過去の救援活動と重ねて論じられた上で、第5章にて筆者のライフヒストリーと諸外国への活動展開の背景が綴られている。

とりわけ第2章が、秩序が重視されていくボランティアの現場への痛切な問題提起となっている。それを筆者は、ボランティアの「真骨頂」は「何でもありや!」の一言に尽きると、端的な表現でまとめている。具体的には、特に災害ボランティアでは「経験がない」人々が、「逆に何でもできる可能性を秘めている」ゆえに「その可能性にかけ、自由な行動原理に基づいて行動できた」と、阪神・淡路大震災以降の活動を総括する(p.75)。その反面、社会福祉協議会を中心とした「災害ボランティアセンター」設置のマニュアル化と、平常時の「ボランティアコーディネーター」の育成も、多様な被災者のニーズに対応していくことを困難にさせていないかと問いかける。この点については評者も同意するところであり、他者が支援するという役割は大事だが、支援のための役職が少しも重要なわけではないだろう。

このように多方面からの考察を経て、筆者は災害ボランティアの心構えとして肝に据えるべき事柄として「減災サイクル」(p.160)への理解を訴える。この「減災サイクル」は応急対応、復旧・復興、事前の備えの先に「自然との共生」(p.159)がもたらされることを謳うものであり、これまで発災時を起点にして復旧・復興の段階を経て甚大な被害への予防をもたらす「災害サイクル」に対峙させた概念である。すなわち、平常時から災害時、そして災害時から平常時へと反復的な変化にいかに対応するかというマクロの視点ではなく、災害ボランティアの現場のミクロな視点に立って、例えば現在であれば地域自立の経済や地域分権など、新しい社会像を構想し、実現していくべきと説かれている。よって、「減災サイクル」として捉えたときには4つの段階の各々のボランティアに固有の役割があるとされ、救援期には「もう一人のいのちを救う」、復興期に

は「最後の一人まで救う」、予防期には「たった一人でも救う」、共創期には「もう一つの社会をつくる」と筆者は構造化した。

こうして、災害の発生から復興、さらにその先の未来に一つの時間軸を貫いて見てみると、東日本大震災においてはTwitterをはじめとしたソーシャルメディアが活用されたものの、それらの活用によって「今」を伝えていく表現は積極的になされた反面、相対的に見てみれば「未来」へと伝えていく表現は消極的になっていないか、とも考えられる。経済的・物質的な側面だけではなく、社会的・文化的・精神的な側面多くの喪失をもたらした東日本大震災には、「文明災」(島2011)であると指摘する声や、「ローカリズム」の視点から「復興のグランドデザインは文学的に書かれなければいけない」(内山2012, p.164)など、多くの語りを遺した。そういう意味で、本書が東日本大震災の発災から3ヶ月で著されたことは、発刊時のみならず、発刊当時の現場の状態を後々に伺い知るための貴重な記録として位置づけられるであろう。それ以上に、被災者一人ひとりに寄り添ってきた筆者が、「被災地NGO協働センター」という団体名を付けた折、「協働」ではなく「協働」と、立心地にて「ともに」という意味の漢字を選択した決意と覚悟に思いを馳せ、評を閉じることとしたい。

渥美公秀. 2011. 災害ボランティア活動:被災地で望まれる活動の仕方. 財団法人集団力学研究所 ニューズレター 54: 3-6.

島大輔. 2011. 梅原猛・哲学者:原発事故は「文明災」、復興を通じて新文明を築き世界の模範に. 東洋経済オンライン
[<http://www.toyokeizai.net/business/interview/detail/AC/14e6e18a6d22fe5395a8e2fb0784fdcd/>] (2012年11月20日閲覧)

内山節. 2012. 内山節のローカリズム原論:新しい共同体をデザインする. 農文協.